

チャプター1 出会い

人里離れた森へ一人籠もり、この場所を維持するための御役目を果たす「狩人」——僕がそう呼ばれてから、もう何年も経つ。他人との繋がりを自ら絶ち、誰の助けも借りずに孤独な暮らしを送る毎日だが……里が次の狩人を決めようとしたあの日、僕は自らこの仕事へ手を挙げていた。

実は、先代の「狩人」は僕の祖父だった。

小さい頃の僕は、年に数回だけ里に下りる彼の土産話を楽しみにしていた。世にも珍しい白のオオカミ、塔の如き風貌の巨大樹、美しい満月の夜の泉……子供ながらに脚色のひとつはあると思っていたが、僕はどの物語にも夢中になった。それが「狩人」への憧れとなったのかもしれない。

祖父がこの世を去る間際。彼は終わりが近いことを悟っていたのだろうか、皆が寝静まった夜、僕だけにこんな話を残してくれた。

あの森には、それはそれは美しい魔女が一人で住んでいる。もし、おまえが狩人になるのであれば、いつか彼女とは必ず出会えるだろう、と。

晴れて狩人となった僕は、皆から期待される御役目を果たしながら、これまで祖父が話した物語の軌跡を辿るように暮らし続けた。そうして、森にまつわる逸話が嘘でなかったことを一つ一つ身をもって実感していく。

白いオオカミに出会った、巨大樹も見た。満月の夜、魂が震える程に美しく光る泉も見た。そして——

「まあ……もしかして、あなたが新しくやって来た狩人様ですか？」

僕は、目の前に現れた女性へ一目惚れしてしまっていた……。

その時はちょうど、森の深い場所を探索するための簡易拠点を作り終えたところだった。三角帽子を被った背の高い女性は僕へ近付くと、やわらかく微笑んでは鈴を転がすような声で話しかけてくれた。

胸元が開けていた格好だったから、僕は視線を吸い寄せられてしまう前に慌てて真下の土を見つめて自己紹介をする。祖父の話と絡めると、彼女はすぐにこちらの事情を理解してくれた。

「そうですか、先代の狩人様は……。伝えてくださりありがとうございます。孫である貴方が御役目を継いだと知れば、きっと喜ぶことでしょう」「貴女の話もお聞きました。森には、綺麗な魔女が住んでいるって」「綺麗ななんてそんな……ああっ、申し遅れてしまいました。私の名前はネリア。私を知る人々からは『魔女』と呼ばれています」

三角帽子を被り、黒のローブを纏った彼女は魔女のイメージそのもの。その長く美しい黒髪も相まって、分別のある淑女と感じさせてくれる。

だがその胸元をちらと見てみれば……まるで寝起きに一枚羽織って出たような無防備な素肌が、眼裏へしっかりと焼き付いてしまう。古来より豊かさの象徴である胸はかつて里で見たどの女性よりも大きく、都市に出ると見かけるどのような女神像より形が整っていて美しい。

少しでも女性の胸へ興味ある男子であれば、間違いなく惹きつけられる身体だった。世間絶ちをした僕のような人なら尚更魅力的に映ってしまうだろう。こんな素敵の人が森の中に住んでいただなんて……

「ネリアさん、ここに拠点を作って、迷惑ではなかったでしょうか？」

「はい、構いませんよ。そうだ、近くに私の家もあるんです。折角広い森の中で出会えたのですから、どうぞ、いらっしゃってください」

「えっ？」

「もう間もなく暗くなります。その様子を見ると、今晚はそこで夜を過ごす予定でしょう？ 食事を出しますので……」

安い祈りは捧げない性分だったが……この時ばかりは、神に助けを求める者の気持ちが分かって仕方なかった。ネリアさんの家に行く？ まだ一目惚れの熱が抜けきっていない中で家を訪れてしまえば、果たして自分はどうなってしまうのだろうか？

狩人として暮らす時間は長いのだ。それなのに、彼女のせいで今後数十年もとには戻らない何かを歪ませられてしまいそうな気がする。

とは言え、この森ではネリアさんが先輩だ。……断らない方がいい。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「ふふっ、ついてきてください。落ちている枝に気をつけて……」

機嫌良く微笑んだネリアさんはこちらへ背を向け、ゆっくりと森の中を歩み始めた。彼女を見失わないよう、僕も道を覚えながら後に続く。

……薄そうな布地のローブが、腰から下にかけてぴっちり張り付いて森の魔女のスタイルをこれでもかと強調していた。彼女が一步步く度に、むちっと張った尻肉が揺れて薄地へ浮かび上がる。

「狩人様が来たのですから、今日は葡萄酒を開けましょうか。丁度、取っておいたものがあります。今後のよい関係も願って……」

ネリアさんはそう言うものの……色々な意味で、不安しかない！

CHAPTER4 パイズリ

ベッドの端に腰掛ける僕の両脚の間で、床に膝をついたネリアさんが、真裸のままこちらを見上げていた。

露わになっていたネリアさんの巨乳は、彼女が何かひとつでも動く度にむちっと揺れて、その大きさと弾力の良さを視覚へ訴えかける。さっきまであれに顔を包まれていたのだと思うと、頭の中が余計に熱を帯びて興奮してしまった。

一方で、ネリアさんの乳の前では……すっかり大きくなっていく堪え性のない勃起ペニス、ぴんと自慢げに上を向いていた。その姿はまるで、これから彼女のおっぱいへ勝負を挑もうとしているかのようで。しかし、決して自分が小さいわけでは無いとは思いたい……ネリアさんの胸の大きさがあまりに規格外で、とても勝負にはなっていない。

「これから、このおっぱいで、狩人様のおちんちんへご奉仕させていただきます……♡」

両方のおっぱいを手で掴んで、それを横へ僅かに開いてみせる。すると、普段は乳肉に閉じられている谷間が露わとなり、そこからの香りが三度僕

の鼻を刺激。いよいよもって男根の準備が整う。

あとは、ネリアさんの「奉仕」を受け入れるだけ……。

「では……」

「あっ……ああ……………！」

ネリアさんは両手を使い、僕のを柔胸でゆっくり挟み込んだ——
にゆり、にゆり……♡ にゆり、にゆり……♡

敏感になっていた竿全体を、ネリアさんのむっちりとした乳肉が飲み込んでいく。一度捏ねられる度にやわらかな感覚に襲われ、なんとも力のない声が漏れてしまう……！

「あっ、あ、あ、ああっ……」

「ふふっ……」

見ただけで犯されそうな大きさの乳。ネリアさんの胸があまりに大きすぎて、谷間から亀頭が出てこない。そのまま彼女は左右の乳房を互い違いに擦り合わせ、こねこね、こねこね、と優しく揉み込んでいく……。

「うあ、あああっ……！」

「どうですか、狩人様？ 私のおっぱいは柔らかいでしょう？」

「はいい……ネリアさんのおっぱい、やばっ、ああっ……♡」

「うふふ、それなら良かった……♡」

むに、むにっ、むにっ……♡ 時には左右交互に、時には円を描くよう

に、飽きの来ない動かし方でペニスを可愛がってくれるネリアさん。

僕は、快楽から逃れようと無意識のうちに腰を揺らしてしまっていた。しかし彼女は逃がしてくれない。「どたぶんっ……♡」と重みのある乳を揺らされると、竿全体をズリッと甘撫でされた快感で尻が落ちてしまう！

「お……っ♡」

「狩人様、可愛い声が出ちゃってますよ♡」

「あ、あああ……だめっ！ 今そこ、敏感でっ……！」

ネリアさんの胸はまるで底無し沼だ。ペニスが挿乳されるとそれはどこまでも深く飲み込まれ、ねっとり吸い付くような肉肌がなかなか逃がしてくれない。竿と亀頭を扱き上げられる度に僕は情けない声を漏らし、背中を仰げ反らせながら、ただひたすらパイズリの快感へ溺れていく……。

「あ、あ……っ！ そんな、おっぱい……！」

「はい、おっぱいで『こしゅこしゅ』しましょうね、狩人様……」

「ひゃあぁっ……♡ やめてっ、ネリアさんいじめないでっ……！」

「ダメです。もっと気持ちよくなってください♡」

ゆっさ、ゆっさ♡ 揺れるおっぱい。有無を言わせぬ捕食行為。

ネリアさんのおっぱいに食べられてる……ダメだ、ちんちんが気持ちよすぎる！ ネリアさんの目の前で、変な顔で気持ちよくなっているところを見られてしまう……！

「ネリアさん、ネリアさんっ……！」

「うふふ、私はここにいますよ、狩人様……♡」

「やっ、手加減して、くださ……ああ……」

「んー？ ごめんなさい、よく聞こえませんでした」

ズリッ——♡

とぼけたような台詞と共に、ネリアさんの乳が落とされる！

「あ、ああああ、おっぱいしゅごいい」

「狩人様ったら……喘ぎ方が女の子みたいですょ？」

「だってえ、ネリアさんのおっぱい、すごく気持ちよくてっ……」

ネリアさんはパイズリしながら、僕の方へ首を伸ばしてくる。それがどういふことか理解してしまった僕は、彼女に答えるように首を伸ばし……ちゅっ、と唇を触れ合わせた。

「んう……」

ネリアさんと、キスをしてしまっている。彼女とは今日出会ったばかりなのに、これではどこからどう見ても恋人同士ではないか。このままではいけないと分かっているけど、ネリアさんから与えられる快樂に抗えない。

ふにつ……。柔らかな唇の割れ目へ舌を伸ばすと、水飴のように甘美なネリアさんの唾液の溜まりに到達した。まるで僕のために溜め込んでくれたようなそれは口付けを介して流し込まれ、理性的な大人の思考がより排されて子供返りしていく。

ネリアさんの口の中、すごく甘い……

小さい頃、親に隠れて舐めた蜂蜜よりも、ずっと、ずっと甘い……

「狩人様ったら甘えん坊。おっばいで、もーっと抱きしめてあげますね」

「あ、あああつ、すご、急に締まるっ……！」

ずにゆうううう………！ ぱちゅっ、にゆるっ、にゆうううう………！

左右から挟み込むように押し潰された乳肉が、亀頭から根元までの全体を一気に圧迫してくる！

「狩人様、おっばいの中でビクビクしていますよ？」

「ネリアさん、そろそろ、出ちゃ——」

「構いません。このまま、私の乳内に全部出してください……♡」

にゆるにゆるにゆるにゆる………「ナカ」に溜まっていた汗と我慢汁が潤滑油となって滑りが良くなると、ネリアさんの動きも速くなる。谷間でたっぷり射精させようとする乳技に抗うことができるわけもなく、僕はネリアさんと目を合わせながら声を上げてしまった。

熱くなった視線がまっすぐに僕を貫く——気持ちよさそうに喘ぐところも、絶頂するところも見逃してくれない！ 全部、目に焼き付けられる！

「はひっ、いいっ！？ いっ、イキま、すあつ、ああっ………！」

びゅー——っ！ どびゆるるるっ、ぶっびゆるるるる——！！

ネリアさんの巨乳に挟み込まれたまま、竿が脈動する程の大量射精……

彼女のフェロモンで醸造された精液を一度に吐き出しながら、視界が白黒する衝撃と蕩ける程の快楽に飲み込まれていく……！

「きゃあっ……！ もうっ、こんなにたくさん、凄いお射精……♡」

奔出した精液は相当量になるはずだが、ネリアさんの乳があまりに大きすぎるせいで表に出てこない。彼女はうっとりとした声色で脈動を褒めたたえた後、ゆさっと乳を揺らして竿全体を扱き上げる。

どぶどぶ……♡ 中に残っているものも、一滴残らず吐き出される……

「ん……狩人様、とっても気持ちよさそうでしたね♡ 私の顔とおっぱいを交互に見ながら、あんなにエッチな反応ばかりしちゃって……。私の胸に挟み込まれるのが、そんなに気持ちよかったですか？ ふふっ♡」

ちゅぽん、と音を立てて下乳からペニスが引き抜かれる。ネリアさんは両乳に手を添えるとそのまま開き……谷間の様子を見せつけてきた。

ネリアさんの乳内は、べっとりとした白濁液を受け止めてどろりとした粘性と性臭を纏い、先程のパイズリ射精がどれだけ気持ちよかったのかを言外に示していた。絞り出された雄汁の一滴一滴は快楽の証、彼女の胸にどれだけ惚れてしまったかを示す決定的証拠……。

「ほら、見てください。貴方のお汁がどろお……と粘ついてしまっています♡ 私のおっぱい、狩人様のおちんちんから、こんなにいやらしいプロポーズを受けてしまいました♡」

「わっ……ああ……」

「ごめんなさい、お酒が入ったせいで、こんなにはしたくない女になってしまっ。でも、狩人様にも原因はあるんですよ？ 初対面なのに最初からあんな風に、私のおっぱいをジロジロ見られてしまったら……」

ネリアさんの谷間で精液の滴が引き伸ばされ、緩い放物線状のザーメンブリッジがお目見えする。彼女はおっぱい全体を片腕で抱えると、まるで谷間全体を器のように扱って、もう片方の手で濃厚な汁を掬い上げた。

「ちゅぷ……じゅ……本心では、いつ狩人様に犯されてしまうか、ずっと様子見していたんです。森の中で出会ってすぐに組み伏されて性のはけ口にされてしまうか、背中を見せた瞬間に後ろからおっぱい掴まれて犯されてしまうか……それとも、料理を作っている最中に、新妻のように身体を使われてしまうのか……」

「そ、そんなっ、ネリアさんがそんなことをっ」

「それだけ、貴方の視線が『雄じみて』いたんですよ。えっち……」

ネリアさんとの初対面……まるで誘っているかのように開いていた胸元から、視線を逸らすことだけを考えることで精一杯だったあの時。こちらが懸命に理性を保とうとしていたのに、彼女はそんなことを……。

「じゅる、じゅじゅっ……狩人様のぷりぷりザーメン、美味しい……♡」

彼女を好き放題に汚し尽くした精液はいつの間にか丹念に舐め取られ、胸元は元の綺麗な輝きを取り戻していた。まだ精液の臭いはこちらへ漂ってくるが、それでも彼女のおっぱいフェロモンが貫通して僕を魅了しよう

としてくる。

顔もペニスも埋もれさせられ、気持ちよくされてしまった。刻み込まれた甘やかしの記憶が、僕の視線を豊満な胸元から離そうとしてくれない。

帰りたい。また、あのおっぱいに包まれたい……。

「あの、狩人様」

息を整えながらネリアさんの方へ視線を向けると……彼女は、色の籠った瞳でじっと僕を見つめ続けていた。すぐに続く言葉こそないが、肌の色から分かる身体の火照りと切ない息遣い、そして物言わぬ淫靡な目つきが、彼女が「続き」を欲しがっていることを示していた。

逃がしてくれない。

どうやら、僕は彼女をその気にさせてしまったようだ――。

「まだ……できますよね♡」